



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「お陰さまカルマ ④」

前回の「ロウソクの炎は自然に消える」について読者からご意見を頂戴したので紹介しておく。

わが輩は比叡山根本中堂の 1200 年間続く「不滅の法灯」について述べたが、根本中堂で修行していた元小僧さんから電話を頂いた。

「戦時中は、灯火なんかしてないよ」

まず菜種油が手に入らない。燈芯一本でも一灯缶の菜種油が必要で数本となると全く手が出なかったそうである。平和であってこそ「不滅の法灯」が成立する。不滅はどこにも存在しないのか？

もう一人はベナレスで受講した禅僧のような孤高の人からである。

「炎は原因があって点くが、消えるのに原因はない。炎は全て自然に消滅する。炎は消えて終わるのではなく続きがありまた炎が生まれる。そのように物事には流れがある。だから始めも終わりもない」

孤高の人は、斯くの如く解釈した。なるほどこのようにも解釈できるのか。

これに類似した話は、ミリンダ王と長老ナーガセーナとの対話でも取り上げられた。

とある男がロウソクに炎をつけた。点火したときの炎 a と 3 分後の炎 b とは同じ炎か？

炎 a と炎 b は同じではないが、別のものともいえない。炎 a が炎 b になれば、炎 a は消滅する。しかし炎 a でもあり炎 b でもあるロウソクの「炎」は燃えている。したがってこの「炎」は ab 同じものでもなく、別ものでもない。

われわれは炎 a と b を分けてみているのではなく、一つの流れの「炎」として見ている。「炎」という実体はなく、単に「炎」という名前をつけているだけである。

もう一つ比喩があるので付記しておく。

泥棒がマンゴー樹の果実を盗んだ。泥棒の言い訳がインド的で面白い。

「おいらは盗んでいないぜ。家主が植えたマンゴーの苗木とおいらが盗んだ成熟樹は違うものだ」

だからおいらは盗んだのではない、と盗人は無罪を主張する。この盗人が有罪か無罪か、次号にゆずるとして、長老はとんでもない比喩を持ち出してきたものである。

実際にあった事例を紹介しておこう。

ある日本人男性がデリーの公園で休んでいた。そこにインド人男性が近づいてきて、自宅に来ないかと誘われた。彼が同性愛者だと分かりすぐに断った。

インド人男性が言った。

「もし、あなたの周辺に食べるものが一つしかなかったなら、とりあえずは目の前にある一つを口にする

だろう？」

(なるほど、その通りだ)

「見てごらん。今われわれの周辺には君と僕しかいない」

(だから、どうなの?)

「さあ、一緒に行こう」

日本人は一瞬納得したが、はたと気づき逃げ出した。

この事例と比喻との関連性は全くない。一瞬“納得”してしまうところが類似している。

一瞬でも納得しないで、わが輩も考えてみよう。

わが輩の細胞は、常に生成・死滅・生成している。つまり変化しているわけだが、読者諸氏は一人の人間「大魔王」として見ている。3分前の大魔王と3分後の大魔王は違うと言わない。そして変化絶え間ないわが輩のことを、諸氏は仮に「大魔王」と呼ぶ。名前だけは仮に固定されているが、わが輩自身は一瞬たりとも固定化された存在ではない。

しかし、炎aがどのようにして炎b、炎cに点火していくのか。ロウソクや燭台がなければ「炎」は成り立たないのではないか。疑問だらけである。

長老が言いたいことは、細胞も大魔王そのものも固定化されたものではなく、不滅のものは存在しない、ということである。

先日Myボス教授の講演会に出向いた。そこで再会した紳士は、わが輩の顔も名前も忘れていた。いや知らなかった。もちろん認知症などではない。二年前には理事会で何度も顔を合わせていた。紳士はわが輩を見ることなくリーダーの顔だけを見ていたのかもしれない。

わが輩の存在自体が、仮の存在、“幻(マーヤー)”であった。もともとわが輩「本人」と思われるものは存在しなかった。それよりさらに仮称である「理事」なるものこそ大幻影である。それに少しながら執着していた。

存在臭さを消すことが修行だと思っていたが、ここまであからさまに“無存在”になると、ちょっぴり落胆する。退任してよかったなどと強気を装うが、何のことはない、まだまだ未熟ということである。